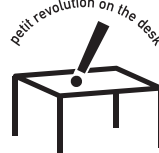


Vol.53

机の上の小さな変革



感覚の境界線

こんにちは、菅俊一です。今回は、普段無意識に使ってしまっている感覚的な言葉について、どう自分のなかで定義して使っているのかについて考えてみたいと思っています。

それでは早速始めてみましょう。みなさんが持っている日用品などから、「かわいい」と思えるモノと「かわいくない」と思えるモノをそれぞれ5つずつ探してみてください。

その際に可能であれば、明らかに「かわいい／かわいくない」と思えるものではなく、「これはギリギリかわいい／かわいくない」と思えるものを選ぶようにしてみてください。

なお、既存のキャラクターなど「かわいい」と思われることを目的につくられたものは選ばないようにしてください。



いかがですか？ では集めていただいたものについて、左側に「かわいい」と思えるモノ、右側に「かわいくない」と思えるモノを並べてみましょう。それぞれのモノはまったく無関係かもしれませんが、並んだモノを見て自分自身が、何をもって「かわいさ」を感じているのか、「かわいい」の境界や条件を考えてみてください。

たとえば、形や大きさ、色などいくつかのパラメータ

ーのバランスがどのような状態だと私たちは「かわいい」と感じるのでしょうか。同じ消しゴムでも、新品のものは「かわいい」と感じないけれど、使われて丸まった状態だと感じるのであれば、大きさや丸みの度合いが「かわいさ」に影響しているのかもしれない。

もしかしたら、たった1つの要素だけでなく、いくつかの要素がどう関係しているのかということも探ってみるとよいかもしれません。

解像度を高めて境界線を探る

今回は「かわいい」の境界について考えてもらいましたが、私たちは普段から感覚的に評価していることについて、1つの言葉で表現してしまうことで、細かく考えずに済ませてしまっていることが多いのではないのでしょうか。

しかし、実際に私たちは「かわいい／かわいくない」を迷わず分別することができることから、様々な要素から感じとった情報を総合して、何らかの基準のようなものによって判断をしているはずです。

いくつかモノを集めて境界を探り、曖昧なままにしている自分のなかにある感覚の基準について解像度高く把握してみようとすることで、本当は何を大事にしているのか、自分自身を深く理解していくことにつながるのです。



PROFILE 菅 俊一 〈SYUNICHI SUGE〉

コグニティブ・デザイナー。表現研究者。映像作家。多摩美術大学美術学部統合デザイン学科准教授。1980年東京都生まれ。人間の知覚能力に基づく新しい表現を研究・開発し、様々なメディアを用いて社会に提案している。主な仕事・著書に、NHK Eテレ『2355/0655』、『観察の練習』『ヘンデコノミクス』など。